

罪の叫び、救いの叫び ——西洋中世の異界探訪譚をめぐって——

後藤 里菜

はじめに

西洋中世はキリスト教世界であり、地位や立場により差異はあれど、誰もが神や天使、悪魔の存在を信じ、死後の〈救い〉を希求していた。神に〈救い〉を求める主たる方法は〈祈り〉で、神により近い修道士たちとは「祈る人」たちであった。その〈祈り〉は小声あるいは〈沈黙〉して行われるもので、修道院とは〈沈黙〉に統べられた世界だった。〈沈黙〉こそが、キリスト教世界で崇敬される修道士や聖人の備える美德であり、神に繋がる姿勢の最たるものであった。

小声や〈沈黙〉の対極は〈叫び〉である。中世が〈声〉と〈音〉の世界であることはつとに指摘されてきたことで、〈叫び〉もまた、政治的・社会的・宗教的に重要な役割を果たしていた点は、中世史研究者ならば誰しも了承済みの所である。音声という対象の扱いづらさから包括的な研究はないものの、〈叫び〉に注目することの有用性は明らかで、本論文もその試みの一端に位置付けられる。中でも、中世世界の特徴であるところの、〈救い〉を希求する宗教的側面に注目してみたい。

中世の宗教的な〈叫び〉のみを主題とした研究書はないが、法制史・社会史・宗教史など多様な文脈から〈叫び〉を扱った論文集、『アロ！ ノエル！ オワイエ！——中世における叫びの実践¹』がある。その中でも、「教会における叫び声²」と「悪魔憑きの叫び³」は、キリスト教世界の〈叫び〉の特徴を捉えた注目すべきものだ。

「教会における叫び声」は、修道院戒律や典礼定式書をもとに、教会や修道院が〈沈黙〉に支配された場所であることを改めて述べ、さらに、音声を伴わない〈叫び〉の存在を指摘している点で意義深い。神への〈沈黙〉した〈祈り〉の理想的なあり方が、「神の耳にのみ届く〈叫び〉」として記述されることがあるのだ。これは、聖書や教父の著作から見られる用法で一考の価値があるが、本論文は音声を伴う〈叫び〉に注目するため、重要性の指摘にとどめておく。

他方、「悪魔憑きの叫び」では、音声を伴う激しい〈叫び〉が、悪魔や悪魔憑き、罪人と結びつくものであり、「悪魔祓い」とは、「悪魔を追い払う」ための儀式であるのみならず、悪魔憑きから「〈叫び〉を取り除く」ための儀式であるとさえ捉えられる点が主張されており、その主張は適切だ⁴。また、聖人伝の中で悪魔祓いを行う側である聖人が、いかなる時にも感情に左右

されず、〈沈黙〉して神に祈ることのできる点が「美德」として叙述されていることにも言及がある。

以上の二論文が示す通り、〈叫び〉と悪魔および〈罪〉との結びつきは、〈沈黙〉と聖性および〈救い〉との結びつきと並び、中世世界に通底するものであった。音声を伴う〈叫び〉は悪魔や罪人の「しるし」であり、聖なる空間から「消える」ことによって、〈救い〉に繋がる役割を果たしたのである。

ところで、〈叫び〉と結びつく悪魔や罪人の住处・行き先と言えば、煉獄・地獄である。その場所の様子を叙述したものに「異界探訪譚」がある。「異界探訪譚」は一般信徒を含む広い聴衆に対し、単なる物語ではなく実体験として語られ、罪深い生き方を改めさせる役割を持った。この種の話の中で〈叫び〉は果たして、〈罪〉のしるしとしてのみ働いているのだろうか。〈叫び〉の意味・役割に変化はあるのだろうか。本論文では、異界探訪譚を題材に、中世キリスト教世界の〈叫び〉のあり方と変容を探ってみたい。

0) 異界探訪譚という史料

「異界探訪譚」は、中世人の世界観や感性を明らかにしてくれるものとして、近年もさかんに研究されている⁵。研究成果をもとに史料の歴史的展開を簡単に述べておくならば、最古の例は、旧約聖書偽典の『エノク書』（紀元前 170–130 年頃）にまでさかのぼる。その後、『パウロの黙示録⁶』をはじめとした 6 世紀頃の作品群が現れ、それにならって、主に修道士や貴族が自らの体験を物語る体裁で発展してゆく⁷。

最盛期を迎えるのは 12 世紀から 13 世紀初頭にかけてであり、ラテン語で長大な作品が作られるようになる⁸。12 世紀頃、罪を浄化する場所である「煉獄」の観念が明確化する中で⁹、その場所の目撃談である異界探訪譚も隆盛を極めたというわけだ。

以下では、そのように成熟を迎えた時期の代表的な作品を三つ取り上げ、その中の地獄・煉獄における〈叫び〉の意味・役割を見てみたい。『トゥヌクダルの幻視』と『聖パトリックの煉獄』、『エインシャムの修道士の幻視』である。

1) 『トゥヌクダルの幻視』

『トゥヌクダルの幻視¹⁰』は、1149 年にレーゲンスブルクを訪れたアイルランド人修道士マルクスが、トゥヌクダルスという名の貴族の話を聞き書きした体裁となっている。レーゲンスブルクの、聖パウロ女子修道院院長ギゼラの依頼によって著された¹¹。

トゥヌクダルスは、馬三頭を貸していた仲間のもとで会食の際に気を失い、死んだと思われ

たが、埋葬のために集まった人々の前で意識を取り戻した。目覚めた時には虚栄心に満ちた貴族のあり方から回心しており、聖体と葡萄酒とともに神を称え、全財産を放棄して貧者に分け与えた。そして、意識を失っている間に訪れた異界での出来事を語るのである。異界は、七つの場所で構成されていたという。宝石、金、銀の壁に囲まれた3つの地上楽園、「喜びの野」と形容される場所とその外、そして上下二層の地獄である。

二層の地獄には、罪の種類に応じた拷問場があった。一層目は八つの拷問場で成り立っており、二層目はまるごと第九拷問場（地獄の深淵）であった。トゥスクダルスは、第一拷問場から順に、より重い罪への拷問場に向かって進んでゆく。それでは、この地獄に出てくる〈叫び〉を見てみよう。

第三拷問場は傲慢の罪に対する懲罰の場所で、強い臭気に満ちた暗い谷であり、暗さのあまり谷底の深さを窺うことはできなかった。だが、「硫黄の川の音と、谷底で苦しむ大勢のうめき声¹²」が聞こえた。「うめき声」と訳した語（“ululatus”）は、わめき声や動物が吠える声としても用いられる単語であり、罪人の、動物的な悲鳴のような〈叫び〉を表している。

続く第四拷問場は強欲の罪への懲罰の場所で、全体が巨大な獣の姿であった。獣の口からは激しい悪臭が漂っており、「獣の腹から口を抜けて、大勢の嘆き声やうめき声（“planctus et ululatus”）が聞こえてきたが、腹の中には非常に恐ろしい償いの責め苦を受ける数千人の男女がいたため、不思議なことではなかった¹³」。「うめき声」と並列された「嘆き声」（“planctus”）は、中世では「プランクトゥス」（服喪の嘆き、哀歌）を示す単語としても用いられたもので、〈叫び〉に悲嘆のニュアンスを付加している。

より下層の第七拷問場には、修道士でありながら姦淫した者、および、身分に拘らず度を越して性的に墮落した者が集められていた。性的な罪への罰であるため、男も女もその全てが妊娠させられ、出産の時が来ると、「叫び、地獄をうめき声で満たしながら、蛇を産み落とした¹⁴」。しかも単なる出産ではなく、腕や胸など身体のあらゆる部分を食い破って蛇が生まれ出ていた。罪人たちの「叫ぶ」（“clamare”）声と「うめき声」（“ululatus”）が空間を満たすほど激しくなっている。

続けて、さらに騒々しい音声の描写が畳みかけられる。あふれかえる氷が鳴らす「キーキーという音」（“stridor”）、罰に耐えようとする罪人の魂の「うめき声」（“ululatus”）、そして獣たちの「うなり声」（“mugitus”）がすべて同時に「響き渡り」（“conclamare”）、天まで届いたという¹⁵。

以上、一層目の地獄の〈叫び〉は、責め苦を受ける罪人が発しており、〈罪〉がそこにあることの「しるし」として役割を果たしている。また、下層へ進むにつれて〈叫び〉の「激しさ」が

増すことから、その「激しさ」が、罪の「重さ」をも表していると言えよう。

二層目の地獄の深淵、第九拷問場への降下の場面では、案内役の天使が姿を消す。そして「そのような危険の中に、一人きりでしばらくいると、驚くほどに大勢の叫び声と嘆き声、恐るべき雷鳴を聞いた——その恐ろしさは、われわれのような小さき者の理解できないもので、トゥヌクダルス自身が認めたように、彼も語り得ないほどのものであった¹⁶」という。つまり、「叫び声と嘆き声」(“clamores et ululatus”)が雷鳴とともに、最下層の地獄への道ゆきの恐ろしさを表す最たるものとなっている。そして、それは言語での説明を越えた「語り得ない」段階にまで達している。

地獄の深淵に至ると、トゥヌクダルス自身が叫び始める。すなわち、「自分自身に憤激するあまり己が眼を爪で引き裂きながら、彼の魂はこう叫んだ。『ああわれに災いあるかな、なぜ私は死なないのか。なぜ、いとも哀れなわが魂は、聖書を信じようとしなかったのか。いかなる狂気が私を欺いたのか』¹⁷」。すると、この〈叫び〉を聞いて、罰を与える道具を持った悪魔たちが集まってきて、周りを幾重にも取り囲む。

悪魔たちは言う。「苦しめ、惨めな魂よ。苦しめ、悲しめ、叫べ、嘆け。お前は、悲しむ者たちとともに悲しみ、泣く者たちとともに泣き、焼かれる者たちとともに永久に焼かれるであろう¹⁸」。このように地獄の深淵の山場は〈叫び〉に満ちている。

以上のように、『トゥヌクダルスの幻視』では、罪人の〈泣き叫び〉が、その他の激しい音とともにより下層の拷問場でより激しくなることで〈罪〉の重さをも示す、〈罪〉の「しるし」であった。

なお、最後に見た地獄の深淵での己の罪を悔いる〈叫び〉は、回心へ向かうものである点で、〈救い〉に繋がる「手段」と捉えることもできる。また、トゥヌクダルスがその〈叫び〉を発したのは、それまでに轟音と罪人の恐ろしい〈叫び〉に満ちた拷問場を見てきたからだ。つまり、道程の〈罪〉の「しるし」の〈叫び〉は、回心を促す過程として〈救い〉に繋がる役割も同時に果たした。異界探訪譚を語り聞かされる一般信徒もまた、矢継ぎ早に登場する激しい音や〈叫び〉により罰の恐ろしさを実感し、同様の悔悛に駆り立てられたことだろう。

総括すれば、『トゥヌクダルスの幻視』では〈叫び〉の〈罪〉の「しるし」としての意味合いが色濃く出ているが、最後の場面では、〈救い〉に繋がる意味も読み取ることができる。次に、より広く伝播した異界探訪譚に目を向けてみたい。

2) 『聖パトリックの煉獄』

12世紀以降隆盛をさわめた異界探訪譚の中でも、『聖パトリックの煉獄¹⁹』はとりわけ広く読

まれたものである²⁰。アイルランド中、ついでまもなくヨーロッパ諸国に伝播し、別の著作にも数多く抄録された²¹。

『聖パトリックの煉獄』とは、そのような名前と呼ばれる、死後世界へ繋がる洞穴をめぐる探訪譚である。その洞穴は、もともと、アイルランドでキリスト教布教活動を行っていた聖パトリックに対してイエス・キリストが啓示したものだ。信仰と改悛の情を持った者がそこから入り、一昼夜を過ごせばあの世での責め苦と褒美を見ることができ、かつ、過ちから浄められるとされた。そこに入れば罪から「浄められた」(“purgatur”)ことから聖パトリックの「浄罪所」(“purgatorium”：“煉獄”と訳されるようになる語)と呼ばれたわけである。洞穴にはヨーロッパ各地から巡礼者が訪れ、宗教改革以降の再三の禁止令にも拘らず、その人気は17世紀まで続いた²²。

物語の主人公、騎士オウェインは、その洞穴を訪問した人物のうち、名前が伝えられている最初の人物なのだ。オウェインは12世紀前半にイングランドで活躍した身分の高い騎士で、アイルランドに帰った後は隠棲していたが、罪を思い起こして洞穴に入ることを決意した。それでは以下、〈叫び〉に注目して見てみよう。

オウェインが穴の中を進んでゆくと、豪華で美しい会堂にたどり着く。会堂に入りしばらく一人で座っていると、修道士然とした人々が入ってきて、そのうちの一人が告げた。「つねに神を記憶にとどめ、奴らがお前を拷問にかけようとしたら、主イエス・キリストの名前を呼ぶように。実にその名を呼ぶだけで、お前はたちまち拷問から解放されるだろう²³」。「奴ら」とは悪魔たちのことである。「呼ぶ」(“inuocare”)は「叫ぶ」と同義ではないが、責め苦にかけられる危機的な場面では容易に〈叫び〉になり得るため、ここであらかじめ見ておいた。

オウェインがそのまま座っていると、「突如、会堂の周りで騒音が聞こえ始め、まるで全地球が鳴動しているかのようであった²⁴」。そして醜い姿の悪魔たちが現れた。「悪魔たちは、騎士が自分たちを無視したのを見て取ると、騎士に向かって恐るべきとどろきを浴びせ、その会堂に燃えさかる巨大な薪の山を組み上げ、手足を縛った騎士を火に投げ、叫びながら、鉄鉤で火炎のあちこちへ引きずり回した²⁵」。悪魔の登場に際して聞かれるのは、地面さえ揺らすほどの大きな音と〈叫び〉(“fremere”; “clamare”)である。

悪魔に脅かされたオウェインが、上記の教え通りにイエス・キリストの名前を呼ぶと、その火炎から解放された。「そうして、悪魔たちは会堂を後にし、嘆き声と恐ろしい騒音(“eiulatus”; “tumultus”)とともに、騎士と一緒に引きずっていった²⁶」。

以上の最初の場面では、〈叫び〉は轟音とともに、悪魔がそこにいることの「しるし」となっている。また、イエス・キリストの名前の「呼びかけ」は、引きずり回されながら必死で上げ

た大声なので、〈救い〉に繋がる「手段」としての〈叫び〉であると言えよう。

その後、オウエインは十種類の責め苦の地を順にまわってゆく。罪の種類は述べられていないが、進むにつれて罰の激しさが増す点は、『トゥスクダルの幻視』と同様である。その都度、お前も罰を受けることになるが、今なら無傷で引き返せる、と言う悪魔の甘言と、教え通りイエス・キリストの名を呼んではオウエインが逃げのびる展開が繰り返される。

第二の責め苦の地では、罪人はうつ伏せで釘に刺される罰を受けており、「全世界の群衆が上げているかと聞き紛うほどの、いとも悲痛な叫び声、嘆き、泣き声が聞こえ始めた。彼らの叫び声と泣き声は、近づけば近づくほど、はっきりと聞こえた²⁷」。オウエインが近づいて「見ると、彼らは、ある時は苦痛のあまり大地に歯を食いしばり、またある時は、泣き声と嘆き声とともに哀れな様子で、『御慈悲を！ 御慈悲を！』、または『憐みを！ 憐みを！』と叫んでいた²⁸」という。

ここでは「叫び声」（“clamor”）と並び、「激しく泣く」「嘆く」（“eiulare”；“flere”）と訳される語が列挙されており、〈罪〉の「しるし」の激しい〈泣き叫び〉を指摘できる。それとともに慈悲や憐みを求める、〈救い〉に繋がる「手段」としての〈叫び〉（“clamare”）が明確に出てきている。

続く第三の責め苦の地での罰は、仰向けの姿勢での釘付けであった。罪人たちは、釘で地面に上向きに固定されて竜に引き裂かれ、蛇に絡みつかれ、巨大な火炎のごときヒキガエルが乗りかかってくる恐ろしい罰を受けていた。「そのように固定され、拷問されている者たちは、泣き、嘆くことを決して止めようとはしなかった²⁹」。

第五の責め苦の地になると、いっそう多様な拷問が行われるようになり、燃える鎖で腕や脚を吊るされた。頭は天地逆さまの状態で硫黄の火に浸けられ、燃える鉄串で刺された者もいた。「さらに騎士オウエインは、そこで、かつての仲間の何人かを目にし、彼らをよく見分けることができた。哀れな者たちの嘆き声や叫び声、あるいは耳にした泣き声を言い表すのに、人間が使ういかなる言語でも足りなかった³⁰」。〈叫び〉の激しさは〈罪〉の重さの反映であり、より重い場所で、言語表現すらも越えている。

さらに終盤の第九の責め苦の地では、火炎を吐く井戸が登場する。悪魔たちはオウエインをこの井戸に突き落とす。深く降りるほどに井戸が広くなり、火炎による苦しみが増し、イエス・キリストの名前すら忘れそうになる。だが、その途端「神によって靈感が降り、われにかえった騎士は、できる限りの声で、主イエス・キリストの名前を叫んだ（“clamare”）³¹」。すると、その〈叫び〉によって、井戸を降下していたはずのオウエインは、空高く投げ飛ばされる。つまり、イエス・キリストの名前の、〈救い〉に繋がる「手段」としての〈叫び〉が、最大の危機的

状況を脱するに際して、中心的な役割を果たしているのである。

最後の第十の責め苦の地には、川と橋の試練があった。その川は硫黄の炎で覆われ、悪魔の群れであふれ返っていた。橋は滑りやすくて狭かったが、オウエインはこれまで同様、イエス・キリストの名前を呼び渡り始める。悪魔たちは「騎士が自由に橋を渡るのを見ると、叫び声を上げて大気を揺り動かした。その叫び声の恐ろしさは、悪魔たちから受けた以前のいかなる罰よりも耐え難いように思われた³²」。ここでは、〈叫び〉が悪魔の恐ろしさを何よりも表現している。

以上のように、『聖パトリックの煉獄』では、『トゥヌクダルの幻視』同様、その重さに比例して激しくなる〈罪〉の「しるし」としての〈叫び〉が、数多く見られる。それに加えて〈叫び〉の、悪魔の存在と恐ろしさを示す「しるし」としての働きも顕著であった。つまり、はじめに述べた先行研究の指摘通り、〈叫び〉が〈罪〉のみならず悪魔とも強く結びついていたことが、異界探訪譚をめぐる考察によっても確認できた。

さらに、特筆すべき特徴として、〈慈悲〉を求める〈叫び〉、およびイエス・キリストの名前の「呼びかけ」の〈叫び〉という、〈救い〉の「手段」となる〈叫び〉がより多様に、より頻繁に登場した。イエス・キリストの名前の「呼びかけ」が直接「叫ぶ」と表現されるのは第九の責め苦の場所のみだが、そこでは中心的な〈救い〉の手段となっていた。また、いずれも悪魔に責め立てられ発せられる大声で〈叫び〉と呼べるものであり、物語を聞いた一般信徒たちは、罰と悪魔の恐ろしさを感じ入るとともに、危機的な状態で聖なる言葉を「叫ぶ」ことの効用を学んだと思われる。

つまり、全体として、〈叫び〉には〈罪〉や悪魔の「しるし」としての意味が強いが、〈救い〉に繋がる「手段」として役割を果たす事例が増す傾向がある。さらに時期の進んだ異界探訪譚ではどうだろうか。

3) 『エインシャムの修道士の幻視』

より後の時期の異界探訪譚として、12世紀末イングランドの『エインシャムの修道士の幻視³³』を取り上げてみたい³⁴。1196年の復活祭の際、エインシャムの修道士エドムンドが二日間意識を失っている間に、聖ニコラオスの導きのもと煉獄と天国を幻視した記録である。

『エインシャムの修道士の幻視』には、煉獄と天国を探訪する叙述以外に、エドムンド自身の十字架への信心や、体験前後の出来事についての記述も含まれる。また、煉獄・天国自体の描写の合間に、そこに振り分けられた人々の生い立ちと由来や、不特定多数の罪人への煉獄での罰の様子が挿入されている。そこで以下では、煉獄自体の描写および、その合間の不特定多数

の罪人の様子を述べた箇所を見てみたい。

煉獄自体の描写の最初には、そこにあらゆる境遇・職業・地位の男女が多数あふれていたことが述べられている³⁵。彼らは「罰を受けてうなり、泣き、嘆いていた³⁶」。うなり声 (“gemere”) や泣き声 (“flere”; “eiulare”) がその場所の最たる特徴で、〈叫び〉が罪の「しるし」として機能している点は、上述の二つの異界探訪譚と共通している。徐々に重い〈罪〉の場所へ向かう構造も同様である。ここでは三段階に分かれている。

第一の責め苦の地では、炎で苦しめられるもの、フライパンの上で焼かれるものから始まり、様々な罰が列挙されている³⁷。修道士や聖職者も数多く罰せられており、その罰の苦しみはいかなる言葉でも表現できないと言う。その苦しみは、恐ろしい〈叫び〉を引き起こすものと思われるが、描写は欠如している。

第二の責め苦の地³⁸、第三の責め苦の地³⁹でも、罰の苦しみが言葉で表現できないほどである旨が繰り返して述べられる。その説明に終始するため、これまでのような罪人の〈泣き叫び〉の描写がない。煉獄自体の描写の最初の記述が、その地の罪人の様子すべてを説明していたというわけだ。ただ、〈罪〉の「しるし」の〈叫び〉がかように著しく減少しているのは、その役割の弱まりと捉えられるだろう。

続いて、煉獄描写の合間に出てくる不特定多数の罪人についての叙述に目を移すと、第二の責め苦の地にいる罪深い女性たちは、聖母マリアに「哀れな声で叫んで⁴⁰」助けを求めている。これは、〈救い〉に繋がる「手段」の〈叫び〉である。

また、第三の責め苦の地にいる罪人のうち、男色の罪ゆえに苦しむ人々について、次のような説明がある。「彼らが経験している苦痛は物すごい。彼らは哀れな人々だ。これらの苦痛と、そして誰も十分語りえないような、さらなる無限の苦痛を経験しているとは。そして、悲嘆に暮れた苦みの鳴咽の間に各々が叫んだ。『ああ、ああ、なぜ私は罪を犯したのか。償われるべき罪はなぜ正されなかったのか』。彼らは償いの痛みを記憶した。そして、涙と嘆きを伴う激しい絶叫による叫びが反響して、世界中に聞かれるように思われるほどであった⁴¹」。

ここでは、〈泣き叫び〉ないし激しい〈叫び〉と訳すことのできる複数の単語 (“flere”; “clamare”; “clamor”; “plangere”; “uociferacio”) が用いられている。その〈叫び〉には、責め苦の苦しみによる、〈罪〉の「しるし」としての〈叫び〉も「悲嘆に暮れた苦みの鳴咽」という形で含まれている。だが、その後の台詞とともに響き渡るのは、そのような苦しみをもたらし自身の罪深さを悔いる〈叫び〉である。これは、『トゥヌクダススの幻視』で自分の罪深さを実感してトゥヌクダススが上げていたのと同様のもので、〈救い〉に繋がる「手段」となる〈叫び〉である。「償いの痛みを記憶した」という形で、その苦しみにより回心しつつ上げる〈叫び〉が、いっそ

う意義深いものとして述べられている。つまり、〈罪〉の「しるし」の〈叫び〉が描かれる数少ない場面においても、〈救い〉の「手段」となる〈叫び〉が存在感を増して並置されているのである。

以上、『エインシャムの修道士の幻視』では、罰の「苦しみ」自体が言語表現の範疇を越えているとされ、それを被る罪人の〈叫び〉の描写にまで至らない箇所が大部分であるため、これまでと比較して〈罪〉の「しるし」としての〈叫び〉の登場がきわめて少なく、〈叫び〉の〈罪〉に関わる役割が弱まっている。他方、〈救い〉に繋がる「手段」としての〈叫び〉は同程度見ることができ、最後に考察した第三の責め苦の地の場面ではより詳しく叙述されていた。それゆえ、〈救い〉に繋がる役割は、発展し強まっていると言えよう。

4) 総括

本論文では、三つの異界探訪譚の煉獄・地獄描写を〈叫び〉の観点から概観してみた。いずれにおいても罪人の〈泣き叫び〉が見られた。その〈叫び〉は「激しさ」で〈罪〉の「重さ」をも示す〈罪〉の「しるし」であり、下層へ行くほど激しい〈叫び〉が空間を満たすのが見てとれた。また、とくに『聖パトリックの煉獄』では〈叫び〉の、悪魔の存在と恐ろしさを示す「しるし」としての役割も顕著であった。つまり、異界探訪譚という、一般信徒を広く聴衆とした史料を通してみても、〈叫び〉の、〈罪〉や悪魔との結びつきは明らかであった。

ただし、その結びつきの強さは一定だったわけではない。最後に見た『エインシャムの修道士の幻視』では、責め苦を受ける罪人の苦しみが言葉で表せないともまとめられてしまうことで、〈罪〉の「しるし」としての〈叫び〉の登場頻度がかなり減っていた。

この点を掘り下げてみると、先述のように『エインシャムの修道士の幻視』には、煉獄・地獄描写以外の叙述が含まれ、中でも煉獄と天国に振り分けられた人々の「生い立ちと由来」の個別的な説明が詳しい点が特徴的な変化として挙げられる。

この変化は、〈罪〉にまつわる関心の変容を示している。すなわち、フライパンで焼かれるなど厳しい責め苦そのものの叙述は変わらないが、その苦しみについては言葉の範疇を越えるほどだと代表させ、かわって、個々の罪人ないし救われた人の生前の様子を伝える箇所を設ける当該作品の構造は、〈罪〉を避け〈救い〉を得るためのより具体的なプロセスに踏み込もうとする姿勢の表れである。この姿勢は、12世紀終わりから13世紀にかけての告解の制度化および、罪を犯した際の「意図」の重視⁴²など、制度的・思想的な発展に呼応したものだ。そして、個々の事情をより詳しく語ることで、それまでに〈叫び〉の激しさが示した〈罪〉の重さの差異以上の事柄が表されるために、〈罪〉の〈叫び〉は役割を終えたかのように影を潜めたのである。

他方で、三つの異界探訪譚すべてに〈罪〉の〈叫び〉と並び読み取ることのできた〈救い〉に繋がる「手段」となる〈叫び〉は、『エインシャムの修道士の幻視』においても継続して描かれ、数少ない〈罪〉の〈叫び〉の出てくる箇所でもそれ以上の役割を主張するように並置されていた。悔悛の〈叫び〉と神や聖母マリアへ慈悲を求める〈救い〉の〈叫び〉は、本論文で扱った異界探訪譚が栄えた12世紀終わりから13世紀の時期以降にも変わらず機能し、やがて中世キリスト教世界の〈叫び〉全体の中で、より主要な役割となってゆくようである。以上、その緩やかな方向性を、異界探訪譚の具体的な考察を通じて炙り出すことができたのではないかな。

おわりに

中世キリスト教世界で〈叫び〉は、〈罪〉や悪魔との結びつきが強く、修道士や聖人という、神により近い人々に注目すれば、「消滅」することでこそ役割を果たすように見えた。罪人の行き先や悪魔の住処である煉獄・地獄に焦点を当ててゆくと、そこでもなお、「消える」傾向があったことは興味深い。だが、それは抑制された消滅ではなく、役割を終えた消滅であった。

なお、〈罪〉の恐ろしさを示す「しるし」となる〈叫び〉の繁栄と減退は、異界の内部（煉獄や地獄）の様子を伝える異界探訪譚のみならず、異界と外部（現世）との関わりを記した史料群にも、同様に読み取ることができる。たとえば煉獄・地獄から現世へ到来する罪人（死者）の集団としてエルカン軍団⁴³がいたが、彼らは〈叫び〉と轟音を伴って現世に現れ、悪魔の「恐ろしさ」と罪人の受ける罰の「苦しみ」とを激しい音声と身振りで伝えた。ところが、このエルカン軍団の跋扈も、13世紀以降には見られなくなる。

また、あの世での贖いの不十分な死者の〈叫び〉が、池や墓から聞こえる類の話は、実話を集めたとされるエクセンブラ集に散見された。だが、14世紀にもなれば「第一に彼ら（死者たち）がわれわれに対して叫ばないようにするため」に死者のために祈る、という言葉説が示す通り、死者たちの〈罪〉への贖いを〈祈り〉で手助けする構造が定着することで、〈罪〉の「しるし」である〈叫び〉は消えてしまう⁴⁴。

このように〈罪〉に関わる〈叫び〉は盛期中世を境に消滅する傾向があるものの、それ以前には本論文で見た異界探訪譚で詳しく描かれたような騒がしく恐ろしげな〈叫び〉が、〈罪〉の意識の定着の過程として必要であった。その意味で単に抑えられた消滅ではなく、役割を全うした上での消滅であり、その過程の恐ろしい〈叫び〉の様相を具体的に追うことは、中世人の世界観に寄り添うことに繋がる。

なお、〈叫び〉の〈罪〉に関わる側面が後退するとともに前面に出てくる、〈救い〉の側面の繁栄を示すものとしては、神や聖母マリアに慈悲や平和を訴える〈叫び〉を伴う、盛期中世以降の

都市世界での宗教運動を挙げることができよう⁴⁵。

中世キリスト教世界の〈叫び〉は、〈罪〉の「しるし」から、〈救い〉の「手段」へとその主要な役割を変化させる。とは言え、悪魔や〈罪〉の〈叫び〉も根強く、そのこだまは中世の間じゅう長く響いている。本論文ではその一端を、具体的な考察を通じて覗くことができたのではないだろうか。

¹ D. Lett & N. Offenstadt (dir.), *Haro ! Noël ! Oyé !: Pratiques du cri au Moyen Age*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2003. 以下、脚注では“*Pratiques du cri*, (cit.)”と記す。

² P. Collomb, “*Vox clamantis in ecclesia*, Contribution des sources liturgiques médiévales occidentales à une histoire du cri,” in *Pratiques du cri*, (cit.), pp. 117–130.

³ F. Chave-Mahir, “Les cris du démoniaque: Exorciser les possédés dans les récits hagiographiques des XIIe et XIIIe siècles,” in *Pratiques du cri*, (cit.), pp. 131–140.

⁴ F. Chave-Mahir, *art.cit.*, p. 137.

⁵ 先行研究は豊富だが、たとえば以下などがある。「異界探訪譚」という分野全体については、松田隆美が著作内でまとめている箇所が明快である。J. Baschet, *Les justices de l’au-delà: les représentations de l’enfer en France et en Italie (XIIe–XVe siècle)*, Rome, École française de Rome, 1993; J. Delumeau, *Une histoire du paradis: I – Le jardin des délices*, Paris, Fayard, 1992 [邦訳、ジャン・ドリユモー『地上の楽園 楽園の歴史①』西沢文昭 小野潮訳 東京 新評論 2000]; 池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』名古屋 名古屋大学出版会 2020; 松田隆美『煉獄と地獄 ヨーロッパ中世文学と一般信徒の死生観』東京 ぶねうま舎 2017 pp. 139–203. 以下、脚注では「松田隆美『煉獄と地獄』(前掲書)」と記す。

⁶ 『パウロの黙示録』には、ラテン語の版が全部で12ある。中でも、中世で広く流布したラテン語版を収録し、それまでの刊行状況・研究状況を整理した以下が有用である。*Visio Sancti Pauli // Breudwyt Pawl: A Bilingual Edition of Redaction IV*, M. Rempt (ed.), BA Keltische Talen en Cultuur, 2015.

⁷ ジャン・ドリユモー『地上の楽園 楽園の歴史①』(前掲書) p. 60.

⁸ 松田隆美『煉獄と地獄』(前掲書) p. 141; 池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』(前掲書) p. 682.

⁹ J. Le Goff, *La Naissance du purgatoire*, Paris, Gallimard, 1981 [邦訳、ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』渡辺香根夫 内田洋訳 東京 法政大学出版局 1988]; B. P. McGuire, “Purgatory, the Communion of Saints, and Medieval Change,” in *Viator*, 20, 1989, pp. 61–84; 池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』(前掲書) pp. 721–727.

¹⁰ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch*, A. Wagner (ed.), Erlangen, A. Deichert, 1882; Hildesheim, G. Olms, 1989 (repr.); *The Vision of Tnugdali*, J.-M. Picard (trans.), Dublin, Four Courts Press, 1989 [邦訳、修道士マルクス／修道士ヘンリクス『西洋中世奇譚集成 聖パトリックの煉獄』千葉敏之訳 東京 講談社 pp. 17–104.] 以下、邦訳版については、『トゥヌクダルの幻視』(前掲書)」と記す。

¹¹ 『トゥヌクダルの幻視』の史料的价值や構造については以下を参照のこと。ジャン・ドリユモー『地上の楽園 楽園の歴史①』(前掲書) pp. 60–61; J. Baschet, *Les justices de l’au-delà*, (cit.), pp. 103–114; C. Carozzi, “Structure et fonction de la vision de Tnugdali,” in *Faire croire. Modalités de la diffusion et de la réception des messages religieux du XIIe au XVIe siècle*, Ecole française de Rome, Università di Padova, Istituto di storia medioevale e moderna (ed.), Rome, Ecole française de Rome, 1981, pp. 223–234; J. Le Goff, *La Naissance du purgatoire*, (cit.), pp. 256–259;

松田隆美『煉獄と地獄』(前掲書) pp. 144–153.

¹² *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 15: “sonitum autem sulphurei fluminis et ululatus multitudinis in imis patientis audire valebat.”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) p. 37. なお、引用文中の下線は以下もすべて、引用者が強調のために付加した。また、本文中に引用するラテン語は、動詞は不定法、名詞は主格の形で統一している。

¹³ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 16: “Set et planctus et ululatus multitudinis de ventre ejus per idem os audiebatur, nec mirum, cum intus essent multa milia virorum ac mulierum dira tormenta luentium.”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) p. 40.

¹⁴ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 28: “Cumque tempus esset, ut parerent, clamantes replebant inferos ululatus et sic serpentes pariebant.”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) p. 58.

¹⁵ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 28: “Et sic simul conclamantes, stridor glacierum inundantium et ululatus animarum sustinentium et mugitus bestiarum exeuntium perveniebant in celum.”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) p. 59.

¹⁶ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 33: “Facta itaque mora, dum esset sola in tantis periculis, audivit clamosos et ululatus mire multitudinis et tonitruum quoque ita horribile, ut nec parvas nostras possit capere, nec lingua ejus, ut fatebatur, valeat enarrare.”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) p. 66.

¹⁷ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 34: “nimio furore repleta in semet ipsam exarsit et genas suas ungulis lacerans clamavit: Ve mihi, ut quid ego non morior? Et quare ego miserrima sanctis scripturis credere nolui? Que me dementia decepit?”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) pp. 67–68.

¹⁸ *Visio Tnugdali. Lateinisch und altdeutsch, (cit.)*, p. 34: “Dole, misera, dole, plora, clama et ulula, lugebis enim cum lugentibus, flebis cum flentibus et in eternum ardebis cum ardentibus.”; 『トウスクダルの幻視』(前掲書) pp. 68–69.

¹⁹ *St. Patrick's Purgatory. Two Versions of Owayne Miles and the Vision of William of Stranton, together with the Long Text of the Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*, R. Easting (ed.), Oxford, the Oxford University Press, 1991; *Saint Patrick's Purgatory. A Twelfth Century Tale of a Journey to the Other World*, J.-M. Picard (trans.), Dublin, Four Courts Press, 1985 [邦訳、修道士マルクス／修道士ヘンリクス『西洋中世奇譚集成 聖パトリックの煉獄』(前掲書) pp. 105–169.] 以下、最初に挙げた史料を“*St. Patrick's Purgatory. (cit.)*,” 邦訳版を「『聖パトリックの煉獄』(前掲書)」と記す。

²⁰ 『聖パトリックの煉獄』の史料価値や位置づけは以下を参照のこと。J. Le Goff, *La Naissance du purgatoire*, (cit.), pp. 259–273; R. Easting, “Purgatory and the Earthly Paradise in the *Tractatus de purgatorio sancti Patricii*,” in *Citeaux: Commentarii Cistercienses*, 37, 1986, pp. 23–48; A. Jeanroy & A. Vignaux, *Voyage au Purgatoire de St Patrice, Visions de Tindal et de St Paul*, Toulouse, Privat, 1903; 松田隆美『煉獄と地獄』(前掲書) pp. 153–165; ジャン・ドリュモア『地上の楽園 楽園の歴史①』(前掲書) pp. 61–62; 池上俊一『狼男伝説』朝日選書 東京 朝日新聞出版 1992 pp. 270–271.

²¹ 『聖パトリックの煉獄』の抄録史料については、H. R. パッチがまとめている。有名なものに14世紀のフロワサールの『年代記』がある。ハワード・ロリン・パッチ『異界：中世ヨーロッパの夢と幻想』黒瀬保ほか訳 東京 三省堂 1983 pp. 122–123; *Chronicles of England, France, Spain, etc.*, John Froissart, T. Johnes (trans.), London, J. M. Dent & Co., New York, E. P. Dutton & Co., 1906, pp. 523–524.

²² 松田隆美『煉獄と地獄』(前掲書) p. 156; A. Jeanroy & A. Vignaux, *Voyage au Purgatoire de St Patrice*, (cit.), pp. 1–54.

²³ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 128: “Deum semper habes in memoria, et cum te cruciauerint, inuoca Dominum Ihesum Christum. Per inuocationem etenim huius nominis statim a tormento liberaberis.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 125.

²⁴ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 129: “subito circa domum cepit audiri tumultus, ac si totus commoueretur orbis.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 126.

²⁵ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 130: “Demonēs igitur, a milite se contempni cernentes, horribiliter fremebant in eum struxeruntque in eadem domo maximi incendii rogam, ligatisque minibus ac pedibus militem in ignem proiecerunt uncisque ferreis huc illucque per incendium clamantes traxerunt.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 128.

²⁶ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 130: “Relinquentes igitur demonēs domum, cum eiulatu et horrido tumultu secum traxerunt militem.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 129.

²⁷ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 130: “cepit quasi uulgi tocius terre miserrimos clamores et eiulatus et fletus audire, et quo magis appropiauit, eo clarius clamores eorum et fletus audiuit.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 130.

²⁸ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 131: “Hii uero aliquando pre dolore uidebantur terram comedere, aliquando autem cum fletu et eiulatu miserabiliter clamare, ‘Parce! Parce!’ uel ‘Miserere! Miserere!’”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 130.

²⁹ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 131: “Qui ita fixi et afflicti a fletu et eiulatu nunquam cessabant.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) pp. 132–133.

³⁰ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, pp. 132–133: “Ibi etiam uidit quosdam de suis quondam sociis et eos bene cognouit. Eiulatus et clamores miserorum et fletus quos audiuit nulla sufficit hominum exprimere lingua.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 135.

³¹ *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 135: “Deo tamen inspirante rediens ad se, ut potuit, nomen Domini Ihesu Christi clamaui.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) p. 141.

³² *St. Patrick's Purgatory. (cit.)*, p. 136: “Videntes autem eum libere transire, ita clamoribus aerem concusserunt, ut intolerabilior ei uideretur huius horror clamoris quam preteritarum aliqua penarum quam sustinuerat ab ipsis.”; 『聖パトリックの煉獄』(前掲書) pp. 143–144.

³³ Adam of Eynsham, *The Revelation of the Monk of Eynsham*, R. Easting (ed.), Oxford, the Oxford University Press, 2002. 『エインシャムの修道士の幻視』は、もともとラテン語で著され、15世紀終わりにエインシャムのアダムが英訳した。上記の刊行史料は、その英訳版と、その際に用いたものにもっとも近いラテン語版(Oxford, Bodleian Library MS Selden Supra 66.)を収録したものである。

³⁴ なお、『エインシャムの修道士の幻視』は、「煉獄」観念の発展について研究した J. ル・ゴフや B. P. マクギーが取り上げている重要な史料である。J. Le Goff, *La Naissance du purgatoire*, (cit.); B. P. McGuire, “Purgatory, the Communion of Saints, and Medieval Change,” (cit.), pp. 61–84, esp. pp. 80–81.

³⁵ Adam of Eynsham, *The Revelation of the Monk of Eynsham*, (cit.), p. 42: “Ibi utriusque sexus, vniuerse condicionis, professionis, & ordinis turba innumerabilis”

³⁶ *Ibid.*, p. 42: “Gemebant quidem, & flebant & eiulabant urgentibus penis,”

³⁷ *Ibid.*, pp. 44–46: “XVI: De diuersitate penarum”

³⁸ *Ibid.*, pp. 48–51: “XVII: De secundo loco tormentorum”

³⁹ *Ibid.*, pp. 76–79: “XXIV: De tercio loco tormentorum”

⁴⁰ *Ibid.*, p. 54: “miserabilibus uocibus exclamare cepit”

⁴¹ *Ibid.*, p. 80: “Miseri uero illi hec vniuersa & alia infinita que nullus enarrare sufficeret sensibilibus experiebantur. Denique inter lamentabiles querimoniarum fletus dum clamaret vnusquisque eorum, ‘Ue! Ue! Quare peccauit? Quare penitendo peccata non correxerit?’ etiam suppliciorum Dolores memorabant, & resultabat clamor flencium & plangencium nimia uociferacione, ut putares hunc in toto mundo audiri.”

⁴² 告解への捉え方の変化については研究も豊富だがたとえば以下などを参照のこと。また罪を犯した際の「意図」の有無についてはアベラルドゥスが論じている。P. Anciaux, *La Théologie du sacrement de pénitence au XIIe siècle*, Universitas Catholica Lovaniensis Dissertationes ad gratum magistri in Facultate Theologica vel in Facultate

Iuris Canonici cosequendum conscriptae, Series II, t.41, Louvain-Gembloux, Nauwelaerts, 1949; *Peter Abelard's Ethics*, D. E. Luscombe (trans.), Oxford, Clarendon Press, 1971.

⁴³ エルカン軍団については、以下にまとめられている。H. Fladieck, “Herlekin,” in *Anglia*, LI, 1937, pp. 225–338; J.-C. Schmitt, “‘superstitions’ au village,” in *Histoire de la France religieuse: Tome I, des dieux de la Gaule à la papauté d’Avignon*, J. Le Goff & P.-A. Février (eds.), Paris, Seuil, 1988, pp. 528–530; ジャック・ル・ゴフ『絵解き ヨーロッパ中世の夢』樺山紘一監修 橘明美訳 東京 原書房 p. 204; J.-C. Schmitt, *Les revenants : Les vivants et les morts dans la société médiévale*, Paris, Gallimard, 1994 [邦訳、ジャン＝クロード・シュミット『中世の幽霊——西欧社会における生者と死者』小林宜子訳 東京 みすず書房 2010 pp. 133–173: 第五章 ヘルレキススの一党].

⁴⁴ *La Scala Coeli de Jean Gobi*, M.-A. Polo de Beaulieu (ed.), Paris, Edition du Centre national de la recherche scientifique, 1991, p. 481 (第 736 話): “Orandum est pro mortuis propter multa. Primo ne contra nos clamant.”

⁴⁵ 特にイタリア都市を舞台とした鞭打ち苦行運動(1260年)やビアンキ運動(1399年)などは、神や聖母マリアに慈悲と平和を乞う〈救い〉の「手段」としての〈叫び〉を高らかに上げている。Cf. G. Casagrande, *Religiosità penitenziale e città al tempo dei comuni*, Roma, Collegio San Lorenzo di Brindisi, 1995; D. E. Bornstein, *The Bianchi of 1399: Popular Devotion in Late Medieval Italy*, Ithaca, Cornell University Press, 1993.

Le cri de péché et le cri de salut : à travers des histoires de l’au-delà

GOTO Rina

Cet article examine « le cri » dans le monde chrétien au Moyen Age, car il y jouait un rôle important tout en étant une période où on communiquait surtout par la bouche plutôt que par l’écrit. Plusieurs chercheurs disent que le cri exprime surtout un sens négatif, signe de péché ou de diable. D’après les documents de l’église et du monastère, c’est sans doute vrai. Or quel est le rôle réel de cri pour les peuples de cette période y compris les laïcs?

Pour répondre à cette question, nous nous intéressons aux histoires des autres mondes parce que celles-ci ont été racontées à tout le monde. De plus, c’est le lieu où reviennent et demeurent les pécheurs et les diables qui sont attachés aux cris. Ces contes ont vu la floraison entre les 12^{ème} et 13^{ème} siècles, nous regardons donc les trois qui y appartiennent: *Visio Tnugdali*; *Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii*; *Visio Monachi de Eynsham*.

Le cri est certes un signe de pécheur et de diable dans toutes les trois histoires. Mais il faut aussi noter que ces cris véhéments ont un autre effet: le personnage principal et les auditeurs deviennent plus pieux en craignant des souffrances que ces cris horribles représentent. Dans ce cas, le cri paraît être un moyen d’atteindre le salut. De plus, nous trouvons des autres types de cri positif: le cri en tant que souhaiter au Dieu ou à la Vierge Mère et en tant que se repentir.

Il est vrai que le rôle de cri négatif continue tout au long du Moyen Age. Mais à cause d’une transformation de façon de regarder des péchés, on raconte de moins en moins de mauvais cris simples. Il faut plutôt examiner la raison pourquoi tel ou tel pécheur est là. D’un autre côté, le cri pour combattre des diables et appeler le Dieu, cri de salut, tient toujours le rôle très important. Cette tendance se confirme selon d’autres documents racontant la rencontre avec des morts.

Faisons le résumé : le cri a plutôt le sens positif comme un moyen de gagner le salut vers la fin du Moyen Age. Cet article a montré une partie de ce changement à travers des documents vifs et intéressants.